

令和3年度厚生労働省補助金事業 看護業務効率化先進事例収集・周知事業

看護業務の効率化 試行支援事業



社会福祉法人高陽会 訪問看護ステーション騏驎

携帯型エコーを用いた排泄ケアの可視化

選択した取り組み(2020年度 最優秀賞 受賞)

訪問看護におけるエコーによる アセスメント導入とICTを使った医師との連携 株式会社トラントユイット

支援施設 訪問看護ステーションフレンズ

試行期間 2021年8月~2023年1月

社会福祉法人 髙陽会

訪問看護ステーション騏驎



寄り添える看護

所在地 和歌山県紀の川市

職員数 10名

うち看護職員数 9名

1

排泄ケアに関わる観察・アセスメントの不正確さによる

利用者のQOL低下

直腸内に便が触れるかの確認や間欠的導尿による観察が必要となり、出血・感染のリスクが伴う。 利用者の協力体制・理解が得られないことも多い。

2

排泄ケアに関わる観察・アセスメントの不正確さによる

看護師の精神的負担

高齢者は複合疾病や認知機能の低下によって自身の状況を正確に説明できないことがある。 そのため、看護師には**高いアセスメント能力が必要**となる。 アセスメントに自信が持てないことで、訪問に時間がかかってしまうことも多い。

排泄物

排泄状況の確認に関する

業務時間の増加

排泄ケアの検討・立案の際、複合疾患がある場合は既往歴やカルテを見直す必要がある。 判断しかねる場合は主治医に連絡する必要がある。 医師への報告には時間がかかる上、**言葉で伝える限界**もある。 結果として**利用者の苦痛が長引く**。

3

取り組み前の従来のフィジカルアセスメントと排泄ケアについての職員アンケート

▶現場でどんな情報収集をしてケアをするに至るか整理

	観察項目	ケアに至る判断情報
排便のケアに関する情報	腹部緊満やハリ・圧痛・腸蠕動音	便意があっても排便できない
	便秘症の既往・個人の排泄パターン	基本的に3日以上排便がないとき
	腹部疾患の既往	前回の排泄ケアの方法
	前回の排便日・緩下剤や浣腸の指示の有無と内容	浣腸や摘便の禁忌の有無
	食事や水分摂取量	排泄方法(おむつ・トイレ)
	便意の有無や失禁状態	全身状態・医師の指示の内容
	直腸内に便が触れるかの確認・疾患名・腹水などの腹部症状	出血リスクの有無
排尿のケアに関する情報	下腹部のハリや緊満・痛みや自覚症状	尿意があっても排尿がない
	前回の排尿時間	下腹部の状態
	下腹部を圧しての尿意の有無	排泄方法(おむつ・トイレ)
	利尿剤の服用状況	全身状態・医師の指示の内容
	日常の排尿パターン	出血リスクの有無
	温尿の有無・浮腫・尿意があって排尿までの時間	間欠的導尿
	既往歷	
	删欠的導尿	

	観察項目		その他	
	一人で判断	禁忌や出血リスクがない		
		医師の指示がある場合	ケアにかかる時間	
		直腸内に硬便が触れた	5分~20分以上	
アセスメントに要した過程				
	上司や医師に相談			
		禁忌や出血リスクがある		
		全身状態が悪いとき		
ケアの妥当性を判断するために 必要な情報	療養者の全身	犬態・薬の知識	そのほかの意見	
	緩下剤の効用。	と効果		
	浣腸の知識と	禁忌・下部消化管や動脈瘤などの腹部疾患全般	・直腸内に便が触れるかの確認は羞恥心や痛みを伴う。	
	排泄方法の種類	頭と効果		
	フィジカルア	セスメントによる情報	侵襲性の少ない方法で情報収集したい。 ・実際に腹の中を見れないので自信をもって伝えきれない。	
	直腸内に使が飼	独れるかの確認をした際	・訴えができない人、認知症の方の判断が難しい。	
			・看護師自身も迷っている。	



複数の観察項目・判断情報から総合的に判断している

高いアセスメント能力の必要性

業務時間の増加

侵襲性の高い観察方法への負担

情報を可視化し適切な観察方法を選択することで

ケアによる利用者の苦痛を最小限に

エコー画像から適切な排泄ケアのアセスメントにつながるため、 直腸内に便が触れるかの確認や間欠的導尿による不要な確認を避けられる

情報を可視化し適切な排泄ケアを選択することで

2 | 看護職員のモチベーション向上

エコー画像から適切な排泄ケアのアセスメントにつなげることができ、 適切なケアが行えたか処置後の確認もできる

画像情報を用いて医師と情報共有することで

業務時間の短縮

利用者の情報について医師と共通認識を持つことで、 排泄状況にあわせた指示をよりスムーズに得ることができる

携帯型エコーの導入

試行支援事業の参加

「訪問介護におけるエコーによるアセスメント導入とICTを使った医師との連携」

(訪問看護ステーションフレンズ) を実施

https://www.kango-award.jp/data/A 1 0317 kangokyoukai2020 stationfrends.pdf

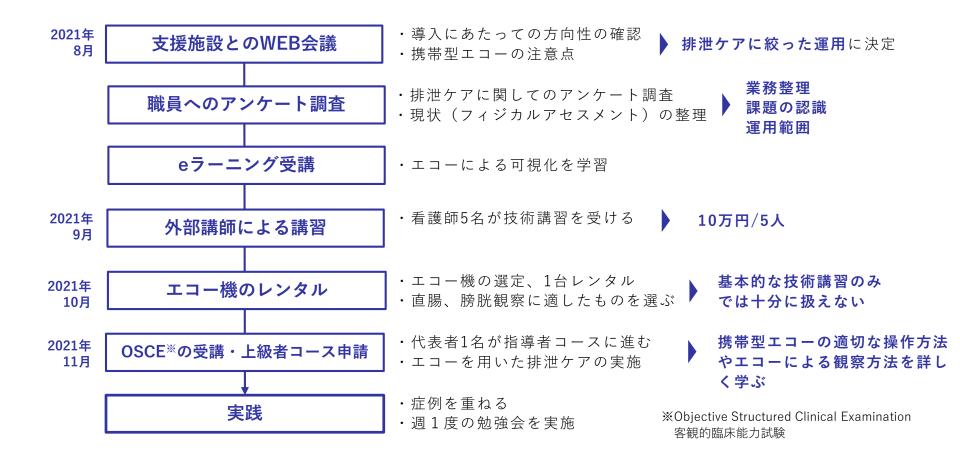
看護業務の効率化 先進事例アワード2020 最優秀賞

株式会社トラントユイット 訪問看護ステーション フレンズ

訪問看護におけるエコーによるアセスメント導入と ICTを使った医師との連携

ブレゼン動画視聴はこちら ▶

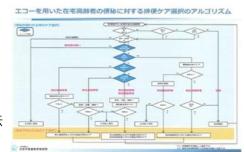




1 | 勉強会の実施(週1度)

上級コース受講者が中心となり 操作技術や活用方法を学ぶ

- ○携帯型エコーの操作法
- ○画像の撮影方法・エコー画像による観察方法
- ○アルゴリズムを用いたケア方法





(出典) 真田弘美・藪中幸一「看護のエコー役立つ!使える!| 照林社,2019年

2 排泄ケアの統一

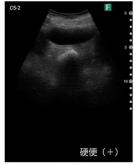
療養者の情報の特徴を共有

○エコー画像、療養者の情報、前回の排泄状況



ケースごとのケア方法を統一 どのスタッフでも同じケアが可能に







1|業務量の削減

- ○療養者の身体情報が可視化されたことによって、療養者の観察・アセスメントが以前より容易になった
- ○ケアの判断が迅速に行える
- ○直腸内に便が触れるかの確認や間欠的導尿による観察が不要になった
- ○医師とのICT連携で対処のタイムリーな相談が可能になった
- ○報告・対応の待ち時間が減少

2|看護師の精神的負担低減

- ○療養者の身体情報の可視化によって、排泄ケアの判断が以前より容易になった
- ○処置後の確認が可能になった 例)バルーンカテーテル挿入後、処置が上手くいっているか等
- ○直腸内に便が触れるかの確認や間欠的導尿による確認が不要になった
- ○感染・汚染のリスクが軽減
- ○療養者に苦痛を与えるリスクが軽減

3|療養者・家族の満足度向上

- ○エコーでの非侵襲の観察によって療養者の苦痛軽減
- ○観察からケアに至る時間の短縮によってタイムリーなケアが可能に
- ○時間短縮によって療養者の苦痛と家族の負担を軽減
- ○エコーの画像を用いてケアの説明をすることで 療養者や家族からの理解・協力がスムーズに



4 | 看護師のケアに対する充足感・安心感の確保

- ○観察の容易化とケアの統一によって 看護師が適切なケアを行えることによる安心感を得られる
- ○療養者の身体情報の可視化によって 療養者に安心感を与えられる

5 地域のケアマネージャー/ステーションの頼りに

○近隣からの排泄ケアの相談に対応することで**地域医療へ貢献**



神経難病の人で排泄障害があるから エコーで確認してほしい



排泄のことで困っている…

- 1 エコーによる観察範囲の拡大
 - ○嚥下機能の観察を可能にすることで、摂食支援の足掛かりに
 - ○がん患者の腹水・胸水の確認を可能にすることで、**患者の苦痛の軽減に繋げる**
- 2 エコー画像を用いたケアの伝達
 - ○携帯型エコー活用のハブに
 - ▶小規模の訪問看護ステーションが多い地域では、研修への参加が難しい
 - ○看護職の悩みを少しでも軽減
 - ○効率的で確実な排泄ケアを地域で行えるように

導入ポイント

- 1 看護職の裁量、役割を明確に持ち、携帯型エコー導入目的を具体化現在の課題の整理、看護職として携帯型エコーで何のために何を見るのか。目的を具体化する
- 2 | 可視化された情報をアセスメントしケアにつなげる 情報の活用方法を考える
- 3 | 看護師のモチベーション向上とスキルアップにもつなげる 対率化を職場環境作りにも活かす